

特別展「没後100年 高峰譲吉記念展」出品目録

〔会期:令和4年(2022)7月30日(土)～10月10日(月・祝)〕

高岡出身の世界的科学者・実業家で日米親善に尽くした高峰譲吉(1854～1922)は、御馬出町の町医者・高峰家の長男として生まれました。長崎や大坂などで英語や医学を学び、のち化学の道へ転向しました。明治27年(1894)には消化酵素剤「タカヂアスターゼ」を発明し世界中に販売しました。同33年には世界初のホルモン物質で強い止血作用をもつ「アドレナリン」を発見し、今なお医療の最前線で使われています。

また譲吉は日米親善にも尽くし、明治37年のセントルイス万博の日本館を移築して「松楓殿」と名付け、日米の政財界人らとの交流の場としました。このほかワシントンとニューヨークに桜を贈るなどの民間外交も展開し、“無冠の大使”としても活躍しました。

さらに譲吉は高岡(富山県)がアルミ産業の適地であると提言し、実際に黒部川の電源開発に取り組みました。現在高岡市は国内有数のアルミ工業地域となり、譲吉の優れた先見性は見事に実を結んでいます。

本展では、高峰譲吉博士顕彰会所蔵の当館寄託資料をはじめ、近年高岡市教育委員会に寄贈された譲吉の別荘「松楓殿」に関わる調度品なども展示し、没後100年を迎える高峰譲吉の功績を紹介します。

最後に、本展開催にあたり格別のご協力を賜りました、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
1	写真パネル「高峰譲吉」	大正期	1	—	高岡市御馬出町出身の世界的科学者・実業家で、晩年は日米親善にも尽くした	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
2	写真パネル「高峰譲吉胸像(高峰公園)」	昭和30年(1955)建立	1	—	高岡市御馬出町51(譲吉の生家跡。現高峰公園)に、生誕100周年を記念して建立された胸像。胸像の台座には、日本初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹による譲吉をたたえる撰文がある	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
3	高峰譲吉愛用 眼鏡	明治後～大正期	3	6.8×12.5 5.3×12.0 6.2×11.5	うち2点はカバー付属	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
4	高峰譲吉愛用 ルーペ・オペラグラス	明治後～大正期	2	ルーペ: 3.6×7.1×厚1.3 オペラグラス: 4.5×9.5×高3.0	ともにカバー付属	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
5	皮下注射器金針	明治～大正期	1	長7.0	—	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
6	耳かき	明治～大正期	1	長8.3	高峰譲吉愛用品。毛抜き付き	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
7	高峰家印章	明治～大正期	2	(印面の寸法) 左: 1.5×1.0 右: 径1.0	左: 朱文方形印「高峰」、右: 朱文円印「精一」(譲吉父)	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
8	名刺「高峰譲吉」	明治～大正期	1	7.3×3.7	—	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
9	銀カップ	大正11年(1922)	1	径5.8×高7.5	「Jokichi to Caroline August 10th 1922」と刻まれている。8月10日(August 10th)は譲吉夫妻の結婚記念日。しかし、この年の7月22日に譲吉は没する。つまり、これは譲吉が生前に妻へのプレゼントとして用意していたものであることがわかる	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
10	龍文銀茶入	明治～大正期	1	径6.5×高5.5	高峰譲吉愛用品	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
11	九谷金彩酒杯(一对)	明治～大正期	2	径5.1×高3.3	底部裏面に「九谷」とあり	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
12	扇面文金蒔絵文箱	明治～大正期	1	24.0×8.5×高4.5	高峰譲吉愛用品	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
13	花鳥山水図扇子	明治～大正期	1	27.3×47.3× 厚1.7	高峰譲吉愛用品	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
14	椿・木蓮文中啓	明治～大正期	1	34.5×32.0× 厚1.5	高峰譲吉愛用品。中啓とは、親骨の中ほどから外側へ反らし、畳んでも上半分が半開きになるように作られた扇のこと	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
15	『先祖由緒并一類附帳』(複写)	明治3年(1870) 10月	1	—	譲吉の父・昇(精一)が著した、高峰家の先祖由緒帳。高峰家初代・刑部永知より代々の事歴が記されている。精一は、安政2年(1855)2月に「壮猶館舎密方臨時御用御雇」に任命されて以来、壮猶館(加賀藩の洋式軍事学校・研究所)で化学者として火薬製造などの研究開発にあたった。一方で同6年2月に「御典医」に任命されてからは、藩主一族の治療をはじめ、藩内の医療行政にも尽力した	原本：金沢市立玉川図書館近世史料館(加越能文庫)蔵
16	写真「銘板「高峰譲吉博士住居跡」」(複写)	平成15年(2003) 撮影	1	—	譲吉が生まれた翌年(1854年)から明治5年(1872)頃まで居住した場所(安江町横町。1871年に石屋小路に改称。現武蔵町、金沢エムザ裏)にある銘板	当館
17	写真パネル「金沢梅本町の旧高峰家」	—	1	—	譲吉の父・精一が明治5年(1872)に梅本町(現大手町)に新築した家。昭和39年(1964)に解体され、離れの部分のみが後に金沢市湯涌温泉江戸村に移築されたが、平成13年(2001)に旧梅本町西隣の同市丸の内(黒門前緑地)地内に復元、移築された	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
18	写真パネル「高峰家7代・幸伯夫妻の墓(高岡市利屋町・大法寺)」	文政7年(1824) 4月建立	1	—	高岡市利屋町の大法寺にある高峰家7代幸伯(?~1802)夫妻の墓。8代幸庵(譲吉の曾祖父)建立	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
19	写真パネル「高峰譲吉と母・幸子、ゆかりの人々」	明治20年代頃	1	—	前列中央の譲吉の向かって右横が母・幸子。幸子は高岡で醸造業を営んだ津田喜三次の娘で、嘉永5年(1852)に譲吉の父・精一と結婚した。明治27年(1894)に60歳で亡くなっていることから、明治20年代の写真かと思われる	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
20	写真パネル「高峰家の墓(高岡市太田・国泰寺)」	平成期撮影	1	—	高岡市太田(西田)の国泰寺は、高峰家8代幸庵が越後高田(現上越市)より高岡に移住した文化10年(1813)よりの縁がある。同寺には、現在高峰家の位牌も保管されている	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
21	写真パネル「高峰譲吉の両親の墓(金沢市寺町・国泰寺)」	平成期撮影	1	—	金沢市寺町の国泰寺は、高岡市太田にある国泰寺の末寺で、譲吉建立の墓がある。写真中央向かって右は、譲吉両親(精一・幸子)の墓、同左は譲吉の兄弟の墓である	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
22	写真パネル「工部大学卒業証書」	明治12年(1879) 11月8日	1	—	譲吉は、工部大学校(現東京大学工学部)で、第1期の化学科(6名)を主席で卒業した。卒業試験では、「第二等」となり、初任給は25円となった	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
23	写真パネル「若き日の高峰譲吉とキャロライン」	明治20年代初め	1	—	明治20年(1887)8月、譲吉はアメリカのニューオーリンズを再訪し、キャロラインと結婚式を挙げた	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
24	ニューオーリンズ万国博覧会会場鳥瞰図(復刻)	昭和59年(1984)	1	43.2×57.6	農商務省の官僚時代、譲吉が主任事務官として派遣された、アメリカのニューオーリンズ万国博覧会(万国工業兼綿百年期博覧会)は明治17年(1884)に開催された	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
25	セントルイス万国博覧会会場鳥瞰図(復刻)	昭和60年(1985)	1	63.0×94.0	譲吉が評議員を務めた同万国博覧会は、明治37年(1904)に開催された	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
26	写真「着物姿のキャロライン夫人」	—	1	19.0×13.3	着物を着た譲吉の妻・キャロライン	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
27	来日中の高峰譲吉へ高峰事務所から報告	明治39年(1906)9月27日付	2	27.7×20.8	差出人は、ニューヨーク高峰事務所の古田宗二郎。譲吉からの文書の返信として論文送付について連絡し、ほか日本倶楽部について報告している	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
28	大隈重信夫妻 昼食会招待状	年未詳(明治39年カ)11月4日付	1	17.8×65.2	大隈重信・綾子夫妻から譲吉宛の昼食会招待状。大隈は、のちに譲吉が提唱した理化学研究所の設立に大きな尽力をした。大隈重信(1838～1922)は、明治・大正期の政治家・教育家。第一次伊藤内閣・松方内閣の外相などを歴任し、史上初の政党内閣を組織した。また、早稲田大学を創設するなど、各種文化運動にも励んだ	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
29	前田利為 晩餐会招待状	年未詳(明治39年カ)11月4日付	1	19.6×61.2	前田家16代当主・前田利為から譲吉宛の晩餐会招待状。帰国されたので、御高話を拝聴したいとある。前田利為(1885～1942)は、旧七日市藩(現群馬県)前田利昭の第5子として誕生。のち前田家15代・利嗣と養子縁組し、相続した。陸軍に入隊。語学に堪能で書画を好み、国際感覚が豊かであった。昭和17年9月5日、ボルネオ方面軍を視察中、飛行機事故で陣没した(陸軍大将)	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
30	森村市左衛門 晩餐会招待状	明治39年(1906)10月9日付	1	23.8×17.2	実業家・森村市左衛門から譲吉宛の晩餐会招待状。森村市左衛門(1839～1919)は、愛知県名古屋市にある陶磁器メーカー「ノリタケ」(現ノリタケカンパニーリミテド)などを創業した実業家	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
31	釈 宗演 書簡	明治39年(1906)12月10日付	1	18.3×82.5	鎌倉円覚寺管長・釈 宗演から譲吉宛の書簡。面会が叶わず残念であることなどが書かれる。釈 宗演(1860～1919)は、明治・大正期の臨済宗の僧。福井県出身。鎌倉円覚寺住職、同派管長、建長寺派管長、臨済宗(花園)大学長を歴任し、海外巡教にも活躍した。金沢出身の仏教学者・鈴木大拙の師	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
32	服部一三 書簡	明治39年(1906)12月27日付	1	18.0×82.5	官僚・政治家の服部一三(1851～1929)から譲吉宛の書簡。兵庫県の酒造会社「菊正宗」醸造家・嘉納治郎右衛門(1853～1935)が面会を希望していることなどが書かれる	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
33	写真「高峰襄吉」	生没年：1888～1930年	1	25.4×20.2	譲吉の長男。エール大卒。ドイツのカイザー・ウィルヘルム研究所、フランス・パスツール研究所を経て、アメリカ・ニュージャージー州クリフトンのタカミネ研究所ほか、諸会社の社長も務めた。しかし、わずか42歳で不慮の事故死を遂げた	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託
34	写真パネル「イリノイ州ピオリアにある高峰工場の樽詰作業」	明治26年(1893)頃	1	—	譲吉が特許をもつ「麦のふすまから作る発酵素」を使ってウイスキーを製造する「高峰式醸造法」によるウイスキー醸造工場	高峰譲吉博士顕彰会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
35	写真パネル「ニュー ジャージー州クリフ トンタカミネ研究所 での瓶詰作業」	—	1	—	ニュージャージー州クリフトンのタカミ ネ研究所で瓶詰作業を行う男性3人	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
36	鳥山敬二郎 書簡	明治39年(1906) 8月21日付	1	17.7×94.2	高岡市木町出身の政治家・鳥山敬二郎か ら譲吉宛の書簡。ウイスキー製造事業の 資本に関する内容などが書かれる。鳥山 敬二郎(1842~1926)は、衆議院議員のほ か、第7・8代高岡市長を務めた	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
37	写真パネル「三共合 資会社販売のタカヂ アスターゼ」	明治42年(1909)	1	—	明治27年(1894)、譲吉が特許を取得し た、販売当初の消化酵素剤「タカヂアス ターゼ」。同42年3月、三共の本店が東京 市日本橋区室町に移転した	第一三共(株)寄贈
38	タカヂアスターゼ 一手販売契約書(複 写)	明治35年(1902) 5月	1	—	明治35年(1902)5月10日付で、譲吉と三 共・塩原又策との間で交わされたタカヂ アスターゼの一手販売契約書	第一三共(株)寄贈
39	看板「タカヂアス ターゼ」	明治後~昭和期	1	88.2×14.0× 厚2.3	消化酵素剤「タカヂアスターゼ」の宣伝 用看板。「高峰博士発見・強力消化素」 とある。制作・藤井看板店(東京日本 橋)	望月保氏寄贈
40	看板「タカヂアス ターゼ」	明治後~昭和戦 前	1	29.7×151.7× 厚2.7	消化酵素剤「タカヂアスターゼ」の宣伝 用看板。制作・藤井看板店(東京日本 橋)。寄贈者の津田俊治氏(譲吉の母・ 幸子の実家の子孫)の収集資料	津田俊治氏寄贈
41	写真パネル「タカヂ アスターゼ宣伝絵葉 書」	明治38年(1905) 頃	1	—	「タカヂアスターゼ」と書かれた文字看 板と、車に乗った譲吉夫妻が描かれる	第一三共(株)寄贈
42	写真パネル「三共商 店創業当時の塩原又 策」	明治後期	1	—	塩原又策(1877~1955)は、神奈川県横浜 市出身の実業家。明治32年(1899)に友人 の西村庄太郎・福井源次郎とともに三共 商店を設立し、タカヂアスターゼを販売 した	第一三共(株)寄贈
43	最初の三共株式会社 定款(複写)	大正2年(1913) 2月1日付	1	—	三共株式会社の設立に際し作成された定 款。会社名、事業内容、株式などの情報 のほか、発起人の名前が書かれている。 同社は、同年3月1日に発足。初代社長は 譲吉、専務に塩原が就任した	第一三共(株)寄贈
44	「タカヂアスター ゼ」文字広告(複 写)	大正8年(1919) 以降	1	—	日刊紙最初のゴシック体広告。三共合資 会社社名。「胃腸諸疾患の大部分は澱粉不 消化に起因す。タカヂアスターゼは之に 対する唯一の薬物なり」と紹介されてい る	第一三共(株)寄贈
45	写真パネル「三共株 式会社大阪出張所淡 路町支店」	大正9年(1920)	1	—	三共株式会社は、明治41年(1908)5月、薬 品問屋街にほど近い、大阪市東区平野町 に「大阪出張所」を開設した	第一三共(株)寄贈
46	写真「三共合資会社 中央薬局店内」(複 写)	大正期	1	32.5×42.5	明治後期、三共合資会社内に設置された 薬局。写真奥上部に「三共株式会社/発 売品小売」、「泰昌製薬会社/発売品小 売」と書かれた看板が見える	第一三共(株)寄贈
47	タカヂアスターゼ	大正~昭和期	1	径4.0×高11.5	譲吉が発明した消化酵素剤「タカヂアス ターゼ」。「ヂアスターゼ」は「酵素」 を意味する「DIASTASE」をドイツ語読み にし、これにギリシャ語で「最高、優 秀」を意味する「タカ」を冠した。日本 における販売元は三共商店〔のち三共株 式会社、現第一三共株式会社〕で、譲吉 は三共株式会社初代社長に就任している	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
48	塩化アドレナリン注射液	大正～昭和期	1	6.2×13.7× 高1.5	アドレナリンは、讓吉と上中啓三が明治33年(1900)に牛の副腎から発見した。強い止血作用などを持つこのホルモン物質を純粋に取り出して結晶化する試みは、この過去43年間、12人の研究者が挑戦していたが誰一人成功できなかった。「ホルモン」という用語が提唱される5年前の快挙であった。液剤医薬品(箱付10アンブル)	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
49	ホーロー看板「タカヂアスターゼ」	昭和中期	1	30.3×45.4	珐瑯製の両面看板。表面には「世界的／強力消化酵素／タカヂアスターゼ」とあり、裏面には「三共の赤箱／強力オリザニンレッド／無痛性ビタミンB1注射液」(1910年、鈴木梅太郎の発見。12年発売)とある	津田俊治氏寄贈
50	写真パネル「アドレナリン発見の報告書」	明治34年(1901)	1	—	アメリカのジョン・ホプキンス大学で研究発表をした際の報告書	第一三共(株)蔵
51	アドレナリン 一手販売契約書(複写)	明治35年(1902)5月	1	—	明治35年(1902)5月10日付で、讓吉と三共・塩原又策との間で交わされたアドレナリンの一手販売契約書。日本でのアドレナリン販売について、三共に任せるというもの	第一三共(株)寄贈
52	樽谷清太郎作《研究室の高峰讓吉博士》(石膏原型)	昭和24年(1949)	1	38.0×18.0× 奥行26.0	高岡市二番町出身の彫刻家・樽谷清太郎(1903～73)が作った讓吉の石膏原型。樽谷は、大正11年(1922)に富山県立工芸学校(現高岡工芸高校)、昭和3年(1928)には東京美術学校(現東京藝術大学)彫刻科を卒業した。その後、帝展・文展・日展などで活躍した	当館
53	写真パネル「ミシガン湖上の塩原・北里・高峰」	明治37年(1904)	1	—	左より、塩原又策、北里柴三郎(熊本出身の細菌学者。1853～1931)、讓吉。3人で、アメリカ・ミシガン州にある製薬会社・パークデイヴィス社を訪問したときのもの	第一三共(株)寄贈
54	晩餐会メニュー	明治末～大正初期	4	27.5×21.8	アメリカ第27代・タフト大統領(任期:1909～13)主催で行われた晩餐会メニュー。レセプション委員の中に讓吉の名前がある	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
55	写真パネル「第8回万国応用化学大会に参列の日本委員たち」	大正元年(1912)10月	1	—	アメリカで行われた、第8回万国応用化学大会に出席した日本委員の記念写真。前列右から1人目が讓吉、3人目が塩原又策、3列目右端は上中啓三。『治療薬法』(第88号)より	第一三共(株)寄贈
56	『高岡新報』掲載記事「富山県下に於ける軽銀(アルミニウム)興業に就て」(中・下)(複写)	大正7年(1918)5月22～23日付	1	—	アルミニウム興業についての讓吉の談話記事。新素材アルミの特性と将来性を紹介し、神通川で発電し、至近の金属加工技術のある高岡、そして港のある伏木に工場を建設し、全国へ出荷する計画などが書かれる(上・中・下の3回にわたって寄稿)	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
57	写真「晩年の高峰讓吉」	大正期	1	23.3×18.0	晩年、スーツ姿で椅子に腰掛ける讓吉	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
58	写真「ワシントン平和会議代表団歓迎宴」(複写)	大正10年(1921)	1	—	左列の前側、手前より5人目が讓吉。同年11月18日、ワシントン平和会議に出席する日本代表団の団長・渋沢栄一子爵ら日本の政財界人一行を迎え、歓迎晩餐会を催した(会場:ニューヨークのアスターホテル)。本会議は第1次大戦後、ワシントンで行われた軍縮をテーマとした平和会議。アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・日本・中国などの代表団が参加した	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
59	写真「高峰讓吉墓」墓碑・花輪(複写)	大正11年(1922)頃	1	9.2×13.3	「高峰讓吉墓」と書かれた墓碑の周りに花輪が並ぶ。花輪には、三共株式会社のほか、南節子・竹橋順子(ともに讓吉の妹)、上中啓三など讓吉ゆかりの人物の名前が書かれている	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
60	『万朝報』「高峰博士の追悼会／未亡人の眼に新しい涙浮ぶ」	大正11年(1922)11月11日付	1	12.7×21.5	讓吉追悼会の記事。日本での追悼会の委員長は渋沢栄一が務めた	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
61	『中央新聞(夕刊)』「高峰博士の追悼会／帝国ホテルにて」	大正11年(1922)11月11日付	1	4.3×5.4	東京・帝国ホテルで行われた讓吉追悼会の記事	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
62	写真「高峰讓吉の墓(ニューヨーク・ウッドローン墓地)」(複写)	大正末期	1	—	ニューヨークのウッドローン墓地にある讓吉の墓。大正11年(1922)7月22日、讓吉はニューヨークで逝去した(享年67)。ニューヨークのセントパトリック大聖堂で行われた葬儀には600人超が参列し、その半数が米国人だったという	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
63	写真パネル「高峰讓吉告別式」	大正11年(1922)	1	—	ニューヨークの日本倶楽部で举行された。正面には讓吉の遺影が掲げられ、多くの花輪が置かれている	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
64	高峰家位牌	年未詳〔大正11年(1922)以降〕	1	28.1×11.5×奥行4.9	初公開資料。讓吉と両親(父・精一と母・幸子)ら5名の戒名が朱書きされ、裏面にはそれぞれの没年月日が書かれる。中央には讓吉戒名「温良院殿讓翁義謙大居士」、裏面には「大正拾壹年七月廿二日」と命日が記される。本位牌は、讓吉の妹・節子の嫁ぎ先(高岡市中川にあった旧家・南家)の菩提寺である、高岡市須田の瑞雲寺(国泰寺派)が所蔵していたもの。讓吉の死後、妹節子やその子孫が奉納したとも考えられる	国泰寺蔵 (瑞雲寺旧蔵)
65	「山林下附御願書」	大正3年(1914)3月18日	1	28.0×19.9	初公開資料。高岡市西田の国泰寺派初代管長で瑞雲寺住職・梅田中巖(瑞雲義幹)や南兵吉(第2代本県議会議長。妻は讓吉妹の節子)ら4名から国泰寺住職・佐竹龍水宛の願書。この山林は、明治40年に讓吉(在米国)が、国泰寺住職の梅田に隠居後の生活のために寄進したもの。梅田が南夫妻提供の隠居地で瑞雲寺を創建したことから、山林を同寺の財産として名義変更してほしいと伝える	国泰寺蔵
66	ポール・ラッセル「アメリカにある日本の春」『アジア』	昭和5年(1930)5月号(第30巻)	1	30.7×22.6	筆者は、アメリカ農務省植物産業局の勤務に関係して、日本の桜の様々な品種について研究する機会があった。アメリカ各地の桜を紹介する記事冒頭で、ワシントンのポトマック公園に桜が寄贈された経緯や、讓吉の尽力について言及している	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
67	「寄贈を忘れることなかれ」『ツーソン・デイリー・シチズン』	昭和24年(1949) 3月30日	1	57.5×42.0	ワシントンの桜祭の素晴らしさとともに、桜の被った受難の歴史にも触れている。譲吉の匿名の尽力に感謝しようと結ばれている。なお、譲吉の孫娘はツーソンに、再婚後のキャロライン夫人はツーソン近郊のベイルに居住していた	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
68	J・E・ジョーンズ 「桜の木の家」『プレス・ホーソン』	昭和26年(1951) 4月19日	1	25.6×16.2	本コラムは、ほかアメリカ国内5紙に掲載されている。ワシントンの桜の植樹が、譲吉の匿名の尽力によって為されたことと、彼の業績について紹介している	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
69	写真パネル「ワシントン・ポトマック河畔の桜」	平成期撮影	1	—	明治44年(1911)譲吉の仲介で、当時の東京市長・尾崎行雄がワシントン市へ3,000本の桜を贈呈した。ポトマック河畔に植樹されたが、その陰にはタフト大統領夫人の意を受けた譲吉の尽力があった(実は2年前にも桜を贈っていたが、害虫の発生により断念していた)	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
70	写真パネル「ポトマック河畔の桜」	—	1	—	Tidal Basin (高潮調整地)の側からの眺め。背景の尖塔は初代大統領ジョージ・ワシントンの記念碑。親日派の米作家エリザ・シドモア(1856～1928)の発想と努力、譲吉の資金提供が、日本からの桜苗木の移植を成功に導いた 撮影：R. Crandall、提供：PPS通信	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
71	世界伝記全集(6)池田政宣著『高峰譲吉』	昭和29年(1954) 11月5日発行	1	20.0×14.0	譲吉の伝記本。総頁数262	高峰譲吉博士顕彰 会蔵・当館寄託
72	メリーウオールド・パーク計画図	1909年	1	75.1×90.2	松楓殿のあった別荘地・メリーウオールド・パークはニューヨーク州サリバン郡モンティチェロ(ニューヨーク市街地より北西約160km)に所在。本図はその内、D・E・F、及びH地区の一部の計画図。松楓殿から南東へ約1km離れた地区であるが、左上に「J. Takamine」と刷られ、右下に1915年1月20日に譲吉が入手した印が捺されている。譲吉は当初、周辺約18万坪(約60万㎡)、のち約183万坪(約607万㎡)の土地を購入したので、本図はその際の図面とも思われる	高岡市教育委員会 蔵
73	メリーウオールド・パークC地区再測量図	20世紀前半	1	44.9×54.3	メリーウオールド・パークのC地区を再測量した地図。本図には松楓殿は描かれていないが、左下に「高峯(峰)」とあり、左図同様に周辺の土地を購入する際の図面とも思われる	高岡市教育委員会 蔵
74	松楓殿 本館図面	明治38年(1905) 頃	1	43.0×71.1	左図は松楓殿本館の正面図、右図は本館東側(向かって左)の側面図。方眼紙に鉛筆で書かれている。小さな図や計算式なども書かれており、移築した際の現場で使ったものとも思われる。側面図に見える「車寄」は、1904年セントルイス万博日本館の内、「眺望亭」といわれる建築の一部で、前年の1903年第5回内国勧業博覧会(大阪)に宮内省が建築用材の模範家屋として出品したものを移築したものである	高岡市教育委員会 蔵
75	松楓殿「春の間」天井画案	明治後期	1	56.0×76.2	「春の間」の天井画の案が2点描かれ、彩色されている。松楓殿に「春の間」は無いが、この図案から「松楓の間」向かって右(西)側の「桜の間」のことかと思われる。ここは後に、ハスやアヤメなどの植物の天井画(展示中)に改修された	高岡市教育委員会 蔵

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
76	松楓殿 食堂中二階 南面壁画図面	明治後期	1	39.6×101.6	紅葉に流水図という琳派を思わせる図案。牧野克次のデザインと思われる。色紙が散らして配置されているが、明治42年(1909)9月、久邇宮邦彦殿下が松楓殿に2泊された際、実際の色紙枠内に和歌を記されたという	高岡市教育委員会 蔵
77	写真「牧野克次(熱海にて)」(複写)	大正末～昭和初期頃	1	—	写真裏面に「熱海」とある。牧野は洋画家。譲吉の別荘「松楓殿」室内装飾・設計をはじめ、1910～12年には譲吉の本邸(ニューヨーク・リバーサイドドライブ)の室内装飾・設計も手がけた	京都工芸繊維大学 美術工芸資料館蔵 (MK-13-03)
78	松楓殿 ボートハウス 図面(左:側面 図、右:正面図)	明治後期	2	左:43.2× 71.2 右:43.4× 71.2	ボートハウス(艇庫)は松楓殿の附属施設として新築された湖畔に建つ和風建築物。別の二階平面図によると、二階は茶室となっていることがわかる。塩原又策『高峰博士(伝記・高峰譲吉)』(1926年)には「釣殿」とあり、明治42年(1909)9月、松楓殿に久邇宮邦彦殿下夫妻が2泊された際、ここで釣りをされたという	高岡市教育委員会 蔵
79	古写真「松楓殿 ボートハウス」(複写)	—	1	—	—	荒井久子氏蔵
80	松楓殿 中二階欄干 欄間(左:食堂、 右:松楓の間)	明治後期	2	左:46.0× 80.5 右:47.0× 85.0	「松楓の間」とその左の食堂は中二階があり、つながっていた。その欄干にはいずれも川辺を飛び交う雀のレリーフの欄間がある。食堂には7枚(本資料は右から2枚目)、「松楓の間」には8枚(同5枚目)あった	高岡市教育委員会 蔵
81	松楓殿「松楓の間」 扉上欄間	明治後期	3	中央:24.0× 40.5 左右:24.0× 65.5×厚4.0	メインゲストルーム「松楓の間」正面(南側)右斜め前の扉上部の欄間。この3点を組み合わせて用いたが、左右の2点の部材は保護のため、補強されている。菊の御紋がみられるので、明治42年(1909)9月の久邇宮邦彦殿下夫妻来訪のための改修の際に加えられた可能性が高い	高岡市教育委員会 蔵
82	松楓殿「松楓の間」 西面最上欄間	明治後期	1	29.0×209.0× 厚1.2	松楓殿のメインゲストルーム「松楓の間」の最上段を飾る欄間。宝相華(奈良・平安時代頃、多く仏教において装飾的模様としてさかんに用いられた想像の植物)の図案が連続して描かれている。本資料は床の間に描かれる能「松風」(牧野克次サインあり)の上部にあったもの	高岡市教育委員会 蔵
83	牧野克次筆 松楓殿 「松楓の間」天井画	明治42年(1909)	1	108.0×105.0	メインゲストルーム「松楓の間」の天井画は全42枚(6×7)あり、その内30枚が商工ビルに移設されている。本資料は移設されなかった12枚の中で、正面向かって右隅から左へ3枚目のもの。キャンバス地に金箔を張り、油絵具で描かれている。これは乾燥したアメリカの気候において、日本的な表現をするための牧野のアイデアである	高岡市教育委員会 蔵
84	牧野克次筆 松楓殿 「松楓の間」中二階 天井画	明治42年(1909) 8月	1	100.0×87.0	牧野の落款「明治四十二年八月為／高峰博士清嘱／北米客中牧野克次」がある。明治42年8月に高峰博士の頼みにより、北米に滞在中の牧野克次が書いたという意味である。松楓殿の中に牧野の落款はこれを含め3点が確認されている	高岡市教育委員会 蔵

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
85	山中商会製 (伝・村上九郎作 作) 菖蒲文椅子	明治42年(1909)	1	76.0×38.0× 奥行38.0	山中商会は明治～戦前を中心に米英に多くの支店を持ち、高級な東洋美術品を輸出販売した国内最大級の古美術商。セントルイス万博にも多数出品し、譲吉は多くを引き継いだ。松楓殿移築に際し、新たに多くの家具を注文した。小松出身の彫刻家・村上九郎作(1867～1919)は納富介次郎に師事し、金沢、高岡の工芸高校の教員となる。のち山中商会大阪工場長となり、多くの家具・調度品類を製作・監修した。本資料は山中商会の製品と判明している4件の内の一つである	高岡市教育委員会蔵
86	松楓殿「桜の間」天井画 (左:ハス、右:アヤメ)	明治後～大正期	2	70.0×72.0	メインゲストルーム「松楓の間」に向かって右(西)側の「桜の間」の天井画は全30枚(5×6)あり、今回は初公開となる。アヤメ、ボタン、キク、ハス、タイサンボクの5種が各6点ずつある。正面に向かって5列目の右端がハスで同列の3番目がアヤメである。古写真や展示中の「春之間」の図面には桜の天井画が描かれているので、現在の植物図は後世の改修と思われる	高岡市教育委員会蔵
87	松楓殿 食堂最上欄間図案	明治42年(1909)	1	55.9×76.1	2案が描かれているが、横を向いた「第一案」が採用された。「実尺」(原寸大)とあり、確かに展示中の実物と同じ大きさで描かれている	高岡市教育委員会蔵
88	松楓殿 食堂北壁図面	明治後期	1	56.0×76.1	食堂は松楓殿に向かって左(東)側の部屋。本図はその北(入口)側の壁面の設計図面。上に展示している花文壁画と鳥鋸歯文欄間も描かれている。花文壁画は図面では花文の背景は家紋散らしだが、実際には唐草文となっている	高岡市教育委員会蔵
89	松楓殿 食堂 鳥鋸歯文最上欄間	明治後期	1	27.5×123.0	食堂の南面(正面側)の左隅、最上段の欄間。食堂の統一モチーフである鳥の文様が、ノコギリの歯状の枠内に連続して描かれている	高岡市教育委員会蔵
90	松楓殿 食堂 花唐草文壁画	明治後期	1	124.0×123.0	食堂の北側左上の壁画。食堂はこの花唐草文が南(正面)側以外の3面にあしらわれている	高岡市教育委員会蔵
91	ダイニングチェア	明治後期	1	95.0×46.0× 奥行46.0	松楓殿関係資料。食堂(ダイニングルーム)用の椅子である。背もたれに金泥と油絵具で鳥や桐のデザインが市松模様で描かれている	高岡市教育委員会蔵
92	古田土雅堂筆 松楓殿 食堂天井画	明治39～40年 (1906～07)	4	ハト: 114.0× 114.0 ニワトリ: 104.0×108.5 ブドウ: 114.0 ×113.0 キジ: 104.5× 109.0	初公開資料。左よりハト、ニワトリ、ブドウ、キジの図。食堂天井画全35枚は現存している。今回、雅堂の孫の荒井久子氏の情報提供により、現栃木県茂木町出身の古田土雅堂(1880～1954)の作であることが判明した。雅堂は東京美術学校(現東京藝術大学)日本画科を卒業し、洋画家や陶磁器のデザイナーとして活躍した人物。キャンバス地だが、日本画科卒の雅堂らしく墨が用いられており、いずれもコミカルに親しみの持てるようなデザインがなされている	高岡市教育委員会蔵

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
93	写真「古田土雅堂」 (複写)	生没年：1880～ 1954年	1	—	洋画家。栃木県芳賀郡中川村（現茂木町）に生まれる。本名貞治。1902年、東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科卒業。1906年渡米。シカゴで働きながら美術を学ぶ。高峰譲吉の別荘「松楓殿」室内装飾（主に食堂）に従事。翌年、ニューヨークで森村ブラザーズ（現ノリタケカンパニーリミテド）に入社。日本から海外に輸出する陶器の絵付けのデザインを制作する。1924年帰国。アメリカから組立式住宅を輸入し宇都宮に建設（町文化財。現在は「道の駅もてぎ」に移築）。昨年茂木町教委は展覧会を開催した	荒井久子氏蔵
94	写真「松楓殿食堂天井画を描く古田土雅堂」 (複写)	明治39年(1906)	1	—	高岡市教育委員会に寄贈された松楓殿食堂の天井画を描く雅堂。この写真と本人の履歴書などによって、雅堂の作であることが判明した。雅堂の孫の荒井久子氏が保存していた。左からハト、エビ、キジ、ニワトリ、ハクチョウ、ブドウの天井画が確認できる。食堂の天井画（全35点）は全て今回の寄贈資料に現存している	荒井久子氏蔵
95	古田土雅堂 履歴書 (複写)	明治40年(1907)	1	—	松楓殿食堂の天井画など室内装飾に関与した、雅堂の履歴書の写し。明治39年(1906)に、「高峰博士別荘／室内荘飾に随事（従事の意）し目下／執筆中」とあり、制作中の写真などと共に松楓殿装飾に雅堂が関与したことが判明する。翌年2月に雅堂はニューヨークの森村ブラザーズ（現ノリタケカンパニーリミテド）に就職したので、その為の履歴書と思われる	荒井久子氏蔵
96	古田土雅堂宛書簡 (複写)	明治39年(1906) 9月10日	1	—	松楓殿のあるメリーウォルド・パークで室内装飾に従事している雅堂に宛てた書簡。差出人は不明。表の左下に「c/o Dr. J. Takamine」とあるが、「c/o」は、「care of ～」（～様方、～気付）の略であり、譲吉の書簡ではないことがわかる。しかし、これにより、雅堂が確かに松楓殿に滞在して仕事をしていたことが判明する。雅堂が寄生虫により体調を崩して誰かに相談した返信と思われる、サントニン（寄生虫駆除剤）を午後3時頃と10時に2個ずつ用いるように指示している	荒井久子氏蔵
97	高峰譲吉書簡（古田土雅堂宛） (複写)	明治41年(1908) 2月19日	1	—	譲吉が雅堂に貸していた日本のデザイン画集を返してもらいたいと頼んでいる。この年から4年間かけてニューヨーク・リバーサイドドライブの高峰本邸の室内装飾の設計・施工の参考のためと思われる（担当は牧野克次をはじめ京都高等工芸学校教授陣や山中商会、川島織物など）。譲吉のサインは印刷されたものであり、部下がタイプライターで作成した文書である	荒井久子氏蔵
98	NY市公園部桜寄贈式 典招待状（古田土雅堂宛） (複写)	1912年4月23日	1	—	譲吉が多額の出資や仲介の労をとってニューヨークへの寄贈が叶った、桜2,500本の銘板除幕式への招待状。グラント將軍の誕生日を記念して、来たる4月27日午後2時半より、リバーサイド公園グラント將軍墓向かいにて挙行される。譲吉の名刺が同封されており、譲吉が雅堂も招待していることから、雅堂も桜寄贈に何らかの関与をした可能性がある	荒井久子氏蔵

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
99	高峰讓吉晩餐会招待状(古田土雅堂宛)(複写)	大正5年(1916)1月17日	1	—	讓吉が来たる1月25日午後7時より日本倶楽部において、日本美術会員との晩餐会に雅堂を招待している。雅堂の松楓殿内装関与から10年後であっても、ニューヨークにおいて付き合いがあったことがわかる	荒井久子氏蔵
100	山中商会製(伝・村上九郎作監修)曲杓	明治後～大正期	1	110.0×51.0×奥行86.0	曲杓は僧侶用の椅子。肱掛けから背もたれの曲線が特徴。中世、禅宗と共に宋から伝わった。本資料は山中商会のカタログに掲載されており、山中製と判明している4件の内の1点	高岡市教育委員会蔵
101	花に孔雀文薩摩焼小壺	明治後～大正期頃	1	径18.0×高23.0	松楓殿関係資料。薩摩焼は鹿児島県で産出する陶磁器。文禄の役後、島津家が朝鮮の陶工を連れ帰り、窯を開かせたのにはじまる。染付青磁や、のち京都から色絵を学び薩摩錦手をはじめたという。また有田の影響で白磁染も焼いた。1867年、薩摩藩がパリ万博へ出品、好評を博し「SATSUMA」と呼ばれ親しまれた。2002年1月、国の伝統的工芸品に指定	高岡市教育委員会蔵
102	置時計	20世紀初頭	1	63.0×27.0×奥行12.0	松楓殿関係資料内にあった米セッションズ社製の置時計。1903年創業の同社は米古時計メーカーの名門ウェルチ社(1864年創業)の流れをくみ、様々な時計を1950年代頃まで生産した	高岡市教育委員会蔵
103	鑿子	—	1	径48.0×高42.0	松楓殿関係資料。鑿子は、家庭用では「りん」「おりん」と呼ばれる、仏教で用いる鉢型の鳴物。高岡の特産品だが、本資料は高岡のものかどうかは不明	高岡市教育委員会蔵
104	松楓殿 カトラリー	明治後～大正期頃	20	—	松楓殿関係資料に含まれていたカトラリー(ナイフ、フォーク、スプーン類)	高岡市教育委員会蔵
105	松楓殿 陶磁器類	明治後～大正期頃	6	—	松楓殿関係資料に含まれていた日本の陶磁器類。九谷焼、伊万里焼など	高岡市教育委員会蔵
106	写真パネル「松楓殿と子供たち」	—	1	—	—	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
107	写真パネル「松楓殿庭園の四阿」	—	1	—	—	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託
108	写真パネル「松楓殿メインゲストルーム「松楓の間」」	—	1	—	—	高峰讓吉博士顕彰会蔵・当館寄託

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

※複写物の寸法は割愛しました。

計108件149点

(公財) 高岡市民文化振興事業団 高岡市立博物館 (富山県高岡市古城1番5号)

TEL:0766-20-1572 FAX:0766-20-1570 <https://www.e-tmm.info>